遊学舎武雄こども園　園だより
2024（令和６）年　９月号

「１７４のこころ」

３歳児のお部屋で、廃材のトレーに絵を描いていたＡさん、Ｒさん、Ｙさんたち。トレーをひっくり返して裏側から見ると、描いた絵は見えなかったけど、Ｙさんがたまたま明るい窓側で見たところ、描いた絵が透けて見えることを発見しました。「ねぇ、こうすると見えないけど、ここだと見えたよ」と嬉しそうに友だちや保育者に伝えてくれました。

それを見た友だちも次々に「僕もやってみたい」「どうやったの？」「ほんとだ」「わたしはここに描いたよ、見えるね！」と、おしえたりおしえあったりしながら、光が当たることで見え方に違いがあることに不思議さと驚きをもっていました。そして、「今度はこれをしてみよう」と、折り紙をかざしたり「懐中電灯にあてたらどうかな？」「やってみよう」とそれぞれが色々なアイディアをだしながら遊びが展開してきました。

一人ひとりの興味・関心で様々な発見が生まれています。友だちの姿がイメージや行動を広げるきっかけとなり、自分も同じようにやってみる子がいます。友だちに真似された子どもは、共感できたうれしさや、認められた喜びを味わっています。さらに一緒に行うことで、新しい遊びが生まれたり、大勢の仲間と意見を出し合って協力したりする遊びも展開しています。一人ひとりの「個性の発揮」と友だちとの「イメージの共有や広がり」両方が体験できるのは、保育の場ならではですね。この体験を大切にしていきたいと思います。

今年は武雄こども園が民営化して１０周年。今、記念誌作成に向け、先生たちのお気に入りの場所のインタビューをしているところです。そのなかでも多かった回答が園庭、そして絵本の廊下。絵本の廊下では、お迎えに来た保護者の方と子どもが本を介して温かな時間を過ごしている様子がお気に入りです、という答えが多くありました。

皆様が子ども時代を思い出した時、一番楽しかった記憶とはどんな風景でしょうか。どんな景色で、どんな匂いがして、どんな方が傍にいて、どんな言葉が添えられているのでしょうか。もう何十年も前なのに、昨日のことよりも、鮮明に覚えている不思議な感覚。多分、これから先もずっとその記憶は変わらず佇んだままなのでしょう。そんな風に、幼い頃の幸せな記憶は、その人の生涯の幸せの根幹となり得る。

ユニセフによる子どもの健康度調査によると、日本の子どもたちの身体の健康度は３８か国中、１位だそうです。しかし、心の幸福度は３７位。では、心の幸福とは一体どんなものなのでしょう。幸福の定義とは、安心して自分が自分を出すことができ、自分の時間や場所が保障されていること、と聞いたことがあります。皆様にとっての幼い頃の幸せの記憶と共にあるのは、そんな「安心」なのかも知れません。そしてその「安心」を基軸とした、ほんの些細な日常の記憶なのではないでしょうか。

子どもが子ども時代を幸せに生きる。そのために何よりも大切なことは、安心してそのままの自分を出すことができること。そして、何にもとらわれず、無条件に認められ、大切にされているという感覚。

日々に追われるなか、無条件でお子様の全てを受け入れることが難しい時もあるかもしれません。しかし、私たち職員は、そんな、ままならない姿も含めた保護者様とお子様の、そのままの姿と共に在りたいと思います。そこに在る姿を一緒に喜び、一緒に悩み、ふと振り返ったとき、「安心」に繋がる何かを感じて頂けたら。それこそが私たちにとっての幸せです。